学友かわら版

国際ロータリー第２７７０地区　学友会発行
第三号　平成２５年７月２６日

目次

１．　「学友コンサートの報告」
学友会会長　関 根 裕 子 …… 1
２．　「南インド　タミルナードゥ州への職業研修」
2011年～2012年度派遣　職業研修チームメンバー
松平　卓 …… 3
３．　「たくさんのナンドリ！」
2011 年～2012 年度派遣　職業研修チームメンバー
倉 金 由 幸 …… 6
４．　「留学はどうだった？！」
2006 年～2007 年度派遣　津田冠名奨学生
…… 9
５．　間もなく出発する 2013 年～2014 年度派遣奨学生
～いってらっしゃい！～ …… 11
６．　編集後記
小 池 剛 史 ……16

学友コンサート　報告

学友会会長　関 根 裕 子

財団学友会では、3 月 17 日(日)「学友コンサート～海を渡るひと・ゆめ・おんがく～」を浦和コミュニティーセンター（コムナーレ）で開催いたしました。

これまでもこのような学友コンサートは数回催されましたが、今回初めて学友会が企画から開催当日の進行に至るまで、財団委員会のご支援を得ながら自主的に運営させていただきました。また近年海外留学を希望する若者が減少傾向にあるということで、ここで改めて外国へ留学する意味をコンサートを通して考えてみるという趣旨で、上記の

ようなサブタイトルのもと、日本の洋楽受容期に夢を実現するために、海を渡り留学した滝廉太郎と山田耕筰を中心に採り上げるコンサートを企画いたしました。

今回は、ヴァイオリンの平澤仁さん（1986 年~1987 年財団奨学生ジュリアード音楽院留学)、ピアノの斎藤晴美さん（2008 年~2009 年財団奨学生　ミラノ音楽院留学)、ソプラノの中津川祥子さん（2009 年~2010 年　ミラノ音楽院留学）の演奏を中心に、私、関根裕子（1997 年～1998 年、ヴィーン大学）が解説を担当し、女声合唱団リーダークライスに賛助出演していただきました。

第一部では、日本で 3 番目の国費留学生としてドイツ、ライプツィヒ音楽院に留学しながらも、2 ヶ月後に結核になり、強制帰国させられた滝廉太郎の 23 歳という短い生涯とその作品に光をあて、有名な「花」を含む合唱組曲「四季」や「荒城の月」に加え、病に倒れ、夢半ばに帰国せざるを得なかった瀧の短すぎる人生への悔しさが激しく書きなぐられたあまり演奏されないピアノ曲「憾」を斎藤さんに弾いていただきました。

第二部は、平澤さんのバッハの無伴奏パルティータ、チャールダッシュ、斎藤さんにショパンのピアノソナタ、中津川さんにプッチーニの《トゥーランドット》からリュウのアリアを演奏していただきました。二部の最後では中津川さんの《蝶々夫人》「ある晴れた日に」に平澤さんのヴァイオリンでオブリガートが入り、いっそうセンチメンタルかつドラマチックな「蝶々夫人」のアリアとなりました。

第三部は、山田耕筰の歌曲「からたちの花」「砂山」などを中心に演奏しながら、彼の日本歌曲における「詩と音楽」の結びつきについての考え方の変遷を話しながら、ベルリン留学の意義を紹介しました。プログラムの最後には、今回の出演者の構成（ヴァイオリン、ソプラノ、ピアノ、合唱）にぴったりで、ほとんど演奏されることのない、たいへん珍しい、大正ロマンあふれる「月の旅」を全員で演奏させていただきました。

桜の開花を待つ春の宵のコンサートのアンコールは、会場の皆様にも加わっていただき「花」の全体合唱で、華やかに楽しく「お開き」とさせていただきました。

コンサート終了後、たくさんのお客様から、励ましやお褒めのお言葉をいただきました。私自身、このコンサートで明治大正期の滝廉太郎や山田耕筰の人生における留学の意義を確認することで、改めて現代の留学の意義を考えさせられました。その中で実感したことは、留学というのは現地に行っている時間だけではなく、留学準備の時間から始まっていること、そして帰国後に留学経験をどこまで活かせるかが、その人にとっての人生を決定づけていくかということです。このことは学友だけでなく、これから留学する奨学生の皆さんにも伝えていきたいと思っています。

最後になりましたが、この場をお借りして、コンサートスタッフとしてご協力いただいた財団奨学・学友委員会、ロータリアン有志の方々、財団・VTT 学友の皆様に感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。皆さまのおかげでコンサートをスムーズに進行させ、成功に導くことができました。またコンサートのチケット販売にご協力いただいた第 2770 地区の各クラブの皆様に御礼申し上げます。おかげ様で当日は約 300 名のお客様にご入場頂きました。またチケット収入の一部を東日本大震災復興資金として、第 2520 地区（田口絢子様）へ寄付し、三陸花ホテルはまぎく（旧波板観光ホテル：女将でロータリアンの山崎緑莉様は津波に流され行方不明のまま）の電子ピアノ購入資金にしていただくことになりま

した。8 月 30 日に再建落成式があり、そこでガレキから製作された震災ヴァイオリンとともに演奏されます。

学友会では、今後このような学友主催の催し物を音楽関連だけでなく、多様な分野に広げ、学友の発表の場、学友同士の交流の場にしたいと考えております。留学経験をどのように活かしながら社会で活躍しているかを、ロータリアンの皆様に知っていただくことで、ある種恩返しにもなりますし、今後の財団奨学生制度の発展にもつながると考えています。また学友同士が専門分野を超えた何かプロジェクトを企画するきっかけにもなる可能性を秘めていると思っております。今後ともご支援のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

写真上
山田耕筰「月の旅」（全体演奏）
写真右　演奏会を終えて
出演者スタッフ一同

南インド　タミルナードゥ州への職業研修

2011年～2012年度派遣　職業研修チームメンバー
派遣先：インド
松 平　　卓

今回のＶＴＴプロジェクトの発端となったのは、2011年度の国際大会の際、2011～2012年度ガバナー：三國ガバナーの隣の席に座っていたのが、今回私達が訪れた「インド：3000地区」のガバナーだった、というところから始まったそうです。その際、2770地区と3000地区で何かをやろうではないか、ということでＶＴＴプロジェクトは立上ったとのこと。

私が、このプロジェクトを知るきっかけになったのは、私の上司（春日部西ロータリークラブのロータリアン）から紹介頂いた、プロジェクトに関する一枚のチラシからでした。

そもそもＶＴＴとは何かというと、VOCATIONAL TRAINING TEAM(職業研修チーム)の略名。プロジェクトの内容は、「インド南部の公立学校の衛生設備の公衆衛生インフラの確立と保険衛生管理改善のための支援」というものでした。建築設計を仕事としている私と建築衛生設備という言葉が多少の関わりがあるため声がかかったようでした。実際インドへ行ってみて、現地インドにて何か職業研修をしてきたのかというよりも、日本人のアイデアをインドの方へ伝えてきた研修であり、職業に直接関係する研修をしたというよりも、インド人の文化に触れることで人生勉強をさせて頂いた感の方が強いかもしれません。

私達が訪れたのは、『タミルナードゥ州』。インドの最南部の東側に位置し、主にタミル語が話されているという地域でした。期間はわずか10日間。その間、車一台でたくさんの街を訪れさせて頂きました。建築現場や病院、工場や学校、他にもたくさんの施設を訪問し、又地区大会にも出席させて頂きました。どこへ行っても大歓迎され、なんだか偉くなったかのような錯覚にも陥りそうになるぐらいでした。外国人がほとんどいないインドの南地区ということもあり、物珍しそうに見に来る方もたくさんいらっしゃいました。

添付の写真からもわかるように、皆とてもフレンドリーであった印象が非常に強いです。また、ロータリアン同士の関係も日本と違い、友達同士のようなコミュニケーションの取り方だった印象が残っています。日本のロータリーというと、とても畏まった上下関係の厳しい日本特有の縦社会の印象を私自身では感じておりました。この辺りも、文化の違いであると感じました。

地区大会も日本の地区大会とは違い、とても砕けた感じであり、歌手やダンサー、コメディアンや映画監督を呼ぶなど、会場が大盛り上がりした印象が非常に強いです。

今回のプロジェクトのテーマでもある衛生についてですが、実際現地へ行ってみて想像していた以上に整備されていないものでした。南部の地域ということもあり、国からの援助がまだまだ後回しになっているような事も仰っていました。しかし、衛生設備の改善の前に衛生に対する考え方の改善のほうが必要であると、私自身では感じました。

訪問先の中で、トイレが不足している小学校へ訪れた時のことです。校長先生から私達ＶＴＴメンバーへ紙コップに入ったお茶を頂きました。飲み干した後、校長先生へ捨てる場所はどこか？と質問したところ何の抵抗もなく『この辺に捨ててしまっていいよ。』との回答でした。この辺というのは、校庭のど真ん中です。

また、寺院へ観光に連れて行って頂いた時の事。お寺は神聖な場所であるがために、中に入るためには裸足になる必要がありました。ところが中に入って驚いたことに、床にはたくさんのゴミが散らばっておりました。

この件についてインドのロータリアンの方に『自宅でもゴミはゴミ箱に捨てないのか』と聞いたところ、自宅ではちゃんとゴミ箱に捨てるとのことでした。自宅を出ると全く別物で、街は既に汚いので所構わず捨ててしまうというのが原因だそうです。よくよく考えてみるとゴミ箱自体、街や学校ではあまり見かけなかった気がします。

こういった一般的なインドの地域とは少し異なる地域にも訪問させて頂きました。地域名：Kodaikanalという南インドの中でも少し標高が高い所で現地では避暑地でありリゾート地とされている地域です。私達が訪れた時の気温は10℃を下回っており、全くインドに来ている感じではありませんでした。また、街も綺麗に掃除がされており景観も全く他の地域とは異なっておりました。

この地区のロータリーの会長さんは、衛生についてかなり重点を置いている方でした。幼少期からゴミ捨ての習慣を身につけさせるために学校にはゴミ箱を設置し、ゴミは必ずゴミ箱に捨てるよう教育をされておりました。街の中にもゴミ箱が設置されており、ゴミ捨ての習慣が街全体に浸透していることを感じました。

インド滞在はわずか10日間ではありましたが、睡眠時間以外のほとんどの時間を現地のロータリアンの方々と過ごさせて頂き、とても内容の濃い10日間となりました。そのため、南インド地区の衛生設備の現状はなんとなくではありますが理解できたと思います。これからはこの現状をどう解決していくかが課題であると感じます。

今回の研修を通じて多くのロータリアンの方々と知り合うことが出来ました。今回の出会いは何かの縁であると思っております。これからも連絡を取り合い、インド人のロータリアンの方々には私達日本人の考え方や、日本の設備などを提案し少しでもインドの衛生設備改善の力になれればと思っております。

以上

VTT 日程表

日	場 所	宿 泊
2/1	成田→Channai	Channai（ホテル）
2/2	Channai→Dalmiapuram	Dalmiapuram（ゲストハウス）
2/3	Dalmiapuram→Trichy	Trichy（ホームステイ）
2/4	Trichy（地区大会1日目）	Trichy（ホームステイ）
2/5	Trichy（地区大会2日目）	Trichy（ホームステイ）
2/6	Trichy→Pudukkottai	Pudukkottai（ホテル）
2/7	Pudukkottai→Madurai	Madurai（ホームステイ）
2/8	Madurai→Kodaikanal	Kodaikanal（ホテル）
2/9	Kodaikanal→Karur	Karur（ホームステイ）
2/10	Karur→Channai	機中泊
2/11	Channai→成田	

9日間の走行距離2,000km!!

一緒に旅をしたロータリアン

セドさん

ラムさん

Tamil Nadu（タミルナードゥ州）

人口　約7,200万人（2011）
　　国内第7位
州都　チェンナイ
地区　32
言語　タミル語（タミルナードゥ州公式）
　　英語（インド全体）
宗教　ヒンドゥー教（88%）
気候　雨期　6月～12月
　　乾期　1月～5月
気温　平野　最高43℃ 最低13.1℃
　　山間　最高32.3℃　最低3.0℃
日本との時差　3時間30分

たくさんのナンドリ!!

2011年～2012年度派遣　職業研修チームメンバー
派遣先：インド
倉 金 由 幸

2011-12年度に春日部西ロータリークラブの推薦を受けましてインドＶＴＴに参加させて頂きました倉金です。

インドでは、水と衛生設備に関する施設、特にトイレを中心に見学してまいりました。

私は今回のＶＴＴでインドの言葉をたくさん覚えました。最初に覚えたのが「ワナッカム（こんにちは）」そして今回の研修で一番言いたい言葉が「ナンドリ（有難う）」です。

他の留学生や奨学生の方は信じられないかも知れませんが、実は私は英語が全くできません。そんな私がインドに行こうと思ってＶＴＴ選考試験で英語の試験を受けたのです。きっと前代未聞の受験生だったのではないでしょうか。

どんな問題が出されたのかもわからないまま、勝手に、「なぜインドに行きたいのか」を日本語で書きました。試験官の鈴木五郎先生も本当に驚いた事でしょう。奇跡的に合格させて頂きましたが、今でもよく合格できたなと不思議に思っております。

試験の後、鈴木先生が、コミュニケーションには、言葉を使ったコミュニケーションと言葉を使わないコミュニケーションがあり、私の場合は、「言葉を使わないコミュニケーションで大丈夫です」と言われたことが今でも心の支えです。

ＶＴＴは、基本的にメンバーが研修期間中一緒に行動します。日本でのオリエンテーションから始まってインドＶＴＴの 11 日間もずっと一緒に行動いたしました。今回集まったメンバーは、それぞれが足りない所を補い合う素晴らしいチームだと思います。

地区大会、壮行会を経て順調に準備も進み、いよいよインドに発つ日が近づきますと期待が膨らむと共に自分の英語力の無さから来る不安もどんどん膨らみました。

そんな私に、インドへ向かう飛行機の中で大きな出会いがありました。

飛行機の中で、現地のタミル語の練習をしておりました。すると、斜め後ろに座っていた黒い顔の目のぎょろぎょろした男が、じっとこちらを見つめていました。ずっとこちらを凝視しているので、恐る恐るワナッカムと話しかけてみると、彼の顔が一瞬にして笑顔に変わったのです。その満面の笑みを見た時、単純な私は、インドでも何とかなると思ってしまったのです。

ずうずうしい私は、空いていた彼の隣の席に移動して一緒に食事をしたり、タミル語のレッスンをしたりして、3 時間半を楽しく過ごしました。

最初からインド人に対する壁が無くなったのは、彼と出会ったおかげです。

インドでは、全部で 6 都市を回りました。各都市で、学校・病院・建築現場・水道関係施設・そして公衆トイレなどを見学させて頂きました。

特に印象深かったのは、学校での大歓迎です。どの学校の生徒たちも、遠い日本から来た私達をキラキラした真直ぐな目で見つめてくれました。踊りを見せてくれたり、歌を歌ってくれたり本当にうれしかったです。

最終日に訪問した公衆トイレで、たまたま壊れたブラシを見かけました。日本からトイレブラシを持ってきていた私は、そのトイレを管理して掃除をしている女性に、ブラシをプレゼントしました。彼女が目に涙を浮かべて喜んでくれたときは、私も感動いたしました。

各都市でその土地のロータリークラブにお世話になりました。

たくさんの例会・食事会に参加しましたが、私は必ず覚えたてのタミル語で自己紹介をしました。彼らの言葉を話す変な日本人を、彼らはとても温かく迎えてくれました。

3000 地区の地区大会にも参加させて頂きました。壇上で話をする彼らを見ていると、マイクに叩き付けるように大きな声で演説をしていました。なので、私も彼らに負けない様に大きな声のタミル語で自己紹介をしたところ、会場中が大きな拍手と笑いに包まれました。その後は、どこに行ってもインド人の輪が出来ました。

今回 3 軒の家庭にホームステイさせて頂きました。

特にマドライのアナンダファミリーとは、大変仲良くなりました。日本について色々質問を受けましたが、英語が解らない私は、うまく答えられず大変悔しい思いをしました。

私達は、何処へ行っても大歓迎を受けました。私は、言葉がわからない分彼らの歓迎に全身を使って感謝の気持ちを表しました。まさに言葉の要らないコミュニケーションで、言葉は無くても気持ちは伝わりました。本当に楽しい毎日で、たくさんのかけがえのない体験と、たくさんの友を得ることが出来ました。

私は今回のインド滞在で現地の人々の生活に触れ、世界の広さを実感しました。世界には、色々な国があり、それぞれ違った人たちが生きている。しかし、自分からその世界に飛び込む勇気さえ持てばこの大きな世界に広がる可能性を持っていることに気づきました。

あっという間の 11 日間が過ぎ帰国いたしました。

帰国後メンバーがインドで感じた事や気付いた事などをレポートにまとめて送りました。そしてインドの友達と話をするために現在英語を勉強中です。

その後地区大会に合わせて来日したインド人とは長い時間一緒に行動させて頂き友情を深めることが出来ました。

その中で、ホストすることの大変さなど沢山の事を学ばせて頂きました。

今年二月に再びインドに行って参りました。マドライのアナンダの家には今年も泊めて頂きましたし、昨年来日したインドチームのメンバー達とは小旅行にも行きました。たくさんの懐かしい人達に囲まれ最高のインド訪問になりました。

一昨年 10 月に始まったＶＴＴ研修ですが、そこで私は、3 つの大切なものを得たと思っております。

１つ目はインドでのかけがえのない体験とたくさんのインドの友と友情で結ばれたこと

２つ目は事前の研修や帰国後の報告会や地区大会などでえた経験やそこで出会ったロータリアンを始め沢山の人達と知り合いになれたこと

そして最後に、一緒にこのインドＶＴＴ研修を乗り越えたかけがえのない仲間を得た事です。

それにより今までと比べられないほどの広い世界が広がりました。

今後この体験を、学友としてどう生かし、自分自身がどう成長できるか、そして大好きになった、タミルの人達と、どうかかわっていけるのか。

まだまだ、私のＶＴＴは続いていきます。

これから先も自分のできることをやっていきたいと思います。

最後になりましたが 2770・3000 両地区のロータリアンを始め、今回のＶＴＴに関わったすべての人達に「ナンドリ（ありがとう）」

インドの兄弟ラジェンドラ

飛行機の出会い

マドライのアナンダファミリー

留学はどうだった？！

2006 年～2007 年度派遣　津田冠名奨学生
留学機関：米国ニューヨーク・コロンビア大学
小　口　聡　美

留学を振り返って思うこと。よく聞かれる、「留学はどうだった？」という質問。答えは簡単には言葉に言い表せない。色々な思いと出来事があるからだ。でも、だからこそ、自分はこう答える。
「よかったよ。」
そう、私は留学に行って良かった。１年という短い間だけだったけど、断然行って良かった。そして、留学はロータリーから奨学金をもらえなければなし得なかった。

私は今、さいたま市の中学校で教員をしている。大学卒業後にコロンビア大学で平和教育を専攻した。その後、コンサルティング会社勤務を経て、今は英語を教えている。
今の生活を送る上で留学は必要かと聞かれると、「絶対に必要だった」とは言えない。留学に行かなかったとしても、英語を教えることはできただろう。でもやはり、今のように自信を持って教えることはできなかっただろう。

留学生活は私に自信を与えてくれた。特に、英語への自信と、困難へ立ち向かうための自信だ。
とは言え正直、留学生活は自信を打ちのめされることの連続だった。ずっと日本で育った私にとって、留学は困難が多かった。それまで、短期留学はあっても、それは外国人向けのコース。みんな英語を母語としないので、落ちこぼれるようなことはなかった。しかし、今回は違った。みな、とにかく自分よりできる。留学生が他にいても、自国の教育言語が英語だったり、渡米後の年数が長かったりする人が多い。日本では学問を努力と根性で乗り切ってきた私だが、留学は本当に厳しかった。今回は何だかスタートの時点で差が開きすぎていて、努力と根性でどうにかなるレベルを超えてしまっているように感じた。１年間で修士号を得る計画の私はすごく焦った。
最初の秋学期はあっという間に過ぎ、劣等感は無くならなかった。友人と学習会を毎週開いていたが、そこでも劣等感は大きかった。７人中６人は留学生。アメリカ人、タイ人、シンガポール人、マケドニア人、メキシコ人、ベネズエラ人、そして私。でも、私だけディスカッションに参加できない。協力して授業を乗り切ろうと始めた学習会なのに、私だけみんなの役に立っていないようで、申し訳なかった。実際、授業が分かっているのかも、よく分からなかった。しかし、不思議と成績は悪くなかった。
冬学期が始まり、日本語学科助手のアルバイトを始めた。生活のために始めたことであるが、自分が誰かの役に立てるということを久しぶりに感じ、嬉しかった。このことがきっかけになったのか、徐々に留学に慣れてきたように感じた。そして迎えた学期末。ディスカッションはまだ苦手だし、英語も怪しい部分があるけれど、論文の考えや理論の構成は負けて

いないと思えるようになった。「自分はアメリカでも何とかなるかも」と思ったのは、帰国２ヶ月前となってからだった。早いうちに日本での就職を決め、もったいないことをしたと思った。夏休みの集中講義の期間は自信が出てきて、友人と遊ぶことも心の余裕を持って楽しめた。

留学経験が絶対必要だったわけでは無いけれど、やはり行って良かった。挑戦することの大切さ、達成感、自信を無くしたときの対処法が分かって、さらに自分に自信を持てた。よく考えれば、授業でディスカッションに参加しない人は他にもいたし、自分は助けてくれる仲間がいた分幸福で、周りにも戦力扱いしてもらえたのだ。

留学を通じて学んだことは今の仕事で、自分のため、そして生徒のために役立っている。私はこれからもさらに挑戦をしていくつもりだ。無理かもしれないと思うこともあるが、やはり後悔したくないし、大変な挑戦には時間をかければいいのだと思えるようになった。

今回、本稿の執筆を頼まれたが、留学をもとにしたかっこいい話は書けない。でもやはり、ロータリーの目指す世界平和のために自分は働いていると、私は思う。

卒業の日に校内で

学習会の同士と授業の打ち上げ

ロータリーの例会にて（後ろは国連）

間もなく出発する 2013～14 年度財団奨学生

～いってらっしゃい！～

石山雄大（いしやまゆうだい）（久喜菖蒲 RC 推薦）

私は、留学をこの夏に控えており、その留学プランについて考え、日々過ごしています。

まず、私が留学を予定している大学院は、シンガポールにある Nanyang Technological University という大学院で、次の特徴があります。１つはカリキュラムがアジアマーケットに焦点が当たっていること、もう１つは留学生のダイバーシティが高いことです。東南アジアの中心に位置するシンガポールで、多様な人種や文化に触れ、国際感覚を身につけようと思っています。

この大学院で参加するプログラムは、今年７月から来年６月までの１年間に渡って行われます。

１年を通しビジネスに関する基礎科目やアジアのビジネス習慣及びマーケットをテーマにした授業がある他、並行的に、諸外国からの留学生と擬似的なプロジェクトを行うグループワークの機会があったり、国際的な環境下におけるリーダーシップに関する授業があります。

私は、アジアの経済・文化や諸外国の留学生と国際理解を深めることを留学の目標としています。この１年間の留学経験を、今後に活かしていきたいです。

吉田　恵（よしだ　めぐみ）（大宮東 RC 推薦）

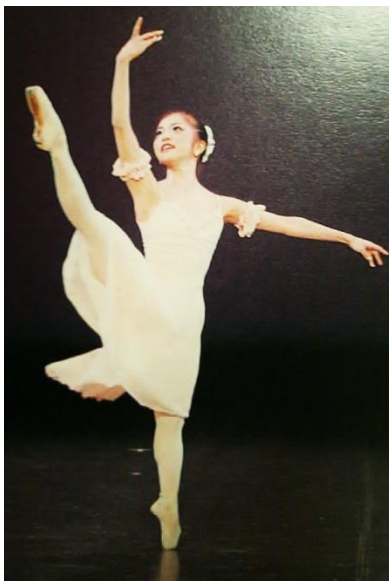
みなさま、こんにちは。５回のオリエンテーションを無事に終え、５月の半ばに、留学予定の大学から合格通知が届きました。ようやく、留学が現実味を帯びてきたところです。ヘブライ大では、イスラエルの政治や文化などを勉強するイスラエル地域研究コースの修士課程に所属する予定です。このプログラムでは、ヘブライ語を学習することが必修になっているので、ヘブライ語学習を集中的に頑張りたいと思っています。現在も、個人的にヘブライ語を習っているので、留学するまでにさらに勉強しておこうと思っています。目標は、イスラエル滞在中に、新聞が読めるようになるレベルに達することです。将来は、イスラエル在住のジャーナリストになりたいと考えているので、ヘブライ語でインタビューが出来るようになりたいです。　アラビア語も機会を見つけて勉強したいと思っています。以前、アメリカに留学した際、イスラエルの歴史という授業をとってからイスラエルにとても興味を持つようになりました。イスラエルに関しては、ニュースで紛争があって怖い国というイメージばかりで、政治や情勢が複雑で難しいところと思っていました。し

かし、複雑そうに見える事柄でも歴史をきちんと理解することによって、現在起こっていることを理解する手がかりになるのだということを学びました。それ以来、イスラエルのことをより深く理解したいと思うようになりました。イスラエルに留学して、言語学習を含め、イスラエルのことをもっと知りたいとずっと思ってきたので、留学できる機会を頂いて、本当に感謝しています。留学中も、イスラエル留学の様子を皆様に報告したいと考えています。せっかく頂いた機会を無駄にしないように精一杯勉学に励もうと思います。夢を実現できようにがんばります。今まで一年間ありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

徳星達仁（とくぼしたつひと）（大宮シティRC推薦）

先日の4月20日、最後となる第5回目の財団奨学生オリエンテーションが無事終了し、いよいよ留学が目前に迫ってまいりました。第5回オリエンテーションには私達の次の年に派遣となる2014-15年度の奨学候補生も参加してくださり、私自身が選考を受けたときから既に一年が経ったのかと思うと、時が経つのは早いものだとつくづく実感

私は2013年9月より一年間、英国ランカスター大学院にて紛争解決学を学んでまいります。コース名は「紛争と開発、安全保障」修士課程（MA Conflict, Development and Security）となります。世界各国から集まる様々な文化や歴史的背景をもつ仲間達と共に、活発に意見交換をしながら、平和構築分野の専門知識を身に付けたいと考えています。
留学後は国際公務員として国連機関で勤務することを目標としており、帰国後もそのための実務経験を積んでまいります。ロータリーの皆様の多大なる協力に感謝申し上げると共に、帰国後も留学先で学んだこと・得た経験を活かして、世界平和に貢献できる人材になるべく精進してまいります。



関理佐（せきりさ）（さいたま新都心RC推薦）

私は9月からロンドン南西部にある国立大学University of Roehampton への留学を予定しています。そこではまず、マネジメントを学ぶために“Project Management”というクラスを取りたいと考えております。近年商売のルール改定や流通経路の発展、IT の導入など様々な急速な変化がありました。これに対し、事業を管理し経営することが如何に大切であるのか、またその効果的な方法について学びます。そして同時に、この事業経営を芸術へどのように取り入れ、活かすことができるのか考えていきたいです。そしてアートマネジメントを勉強する上で欠かせないことは実際の舞

台について学ぶことです。そこで“Stage ~Introduction to the London Stage”　という授業によって演劇や劇場、劇団について、長い歴史がありながらも新しいことに敏感に反応し、評価され続けるロンドンで多くのことを吸収したいです。

マネジメントを学びながら並行してダンスクラスの受講も予定しております。University of Roehamptonはダンスコースに定評があり、その授業の数や種類も豊富なため、日本では学ぶことの出来ない分野を広く、そして専門的に勉強することが期待されます。加えて大学の立地は実際に生の舞台を気軽に鑑賞しに行くことが出来るため、その宣伝方法やチケット販売の仕組みを研究するのに非常に適しております。

このような恵まれた環境の中で多くのことを経験し、現在の仕事に役立てたいと思います。そして最終的には芸術がより多くの人々に理解され、愛されるために活動していきたいと思います。

学友会　幹事会からのお知らせ

「学友　かわら版」創刊号でもお願いお知らせ致しましたが、2770 地区各学友会では、学友会活性化のための名簿整理と皆様のご意見収集に努めております。つきましては、以下の項目をご記入の上、学友会のアドレスに送信していただきますよう、再度お願い申し上げます。すでにお送り頂いた方は、どうぞご放念下さい。

（1）お名前　（2）留学年度と奨学金の種類（財団・米山・GSE・VTT)　（3）スポンサークラブ　（4）留学先　（5）現在のお勤め先または職業　（6）ご専門（7）学友会へのご意見やご要望

学友会メールアドレス gakuyu2770@gmail.com

どうぞ宜しくお願い致します。
学友会　幹事会

「学友　かわら版」第三号をお届け致します。

今号は、大盛況の学友コンサートの報告に始まり、ＶＴＴの松平様、倉金様のインド訪問のご報告、ニューヨーク・コロンビア大学に留学された小口様のご報告、そして間もなく留学する 4 人の 2013 年～14 年度派遣奨学生の皆さまの近況報告と、大変盛り沢山です。インドへの 10 日間の派遣のお話しは、日本とは大きく異なるインドのゴミ事情、またインドの人々の温かいおもてなしが目に映るようです。またコロンビア大学での留学体験記は、自分自身現地の学生たちとの議論についていけず苦い思いをした経験がよみがえるようなお話しでした。そして、これからヨーロッパへ、アジアへ、中東へ留学される皆さまの希望、熱意に溢れる思いを記して頂きました。奨学生の皆さま、どうか留学地からもご投稿宜しくお願いします！

ＶＴＴの倉金様の記事の中に、「私のＶＴＴはまだまだ続いていきます」という言葉がありました。何か心に響くものがありました。留学は行って帰ってきて終わりではなく、その準備から既に始まっており、また帰国後も、その本人が留学した意味を問い続けるならば、その後もずっと続くということです。海外の暮らしと日本での暮らしはあまりにも違い過ぎる。留学経験者は帰国後数年も経つと、海外で暮らしていたことがあたかも夢のように思えることがあります。しかし、留学していた自分も帰国した日本の自分も同じ自分であることを、留学の中で経験したことが現在の自分の居場所の中でどう活かせるかを意識し続けるならば、留学はずっと続くのです。そんなことを、編集をしながら感じました。

この度ご投稿下さいました皆さま、本当にありがとうございました。

（「学友　かわら版」編集担当　小池剛史）